

End of Life Careにおけるソーシャルワークの概念に関する一考察

ー実践と学問の止揚をめざしてー

○ 医療法人社団崇仁会 船戸クリニック天音の里 松久 宗丙 (006214)

キーワード: End of Life Care、ソーシャルワーク、実存性と科学性

1. 研究目的

わが国において、End of Life Careに関連する用語や概念は少なくない。例えば、ターミナルケアやホスピスケア、終末〈期〉ケアなどである。これらの実践や研究は主にがんを対象とした医療や看護の領域で発展してきた歴史がある。

End of Life Careの概念は、1995年前後から北米を中心にターミナルケア及びホスピスケアの理念を受け継ぐ人生の最期を尊重した概念として新たに用いられるようになってきた。End of Life Careでは、さまざまな職種によるチームアプローチを必要とし、どこで最期を迎えるのかではなく、どう生きるのかに着目をし、地域でどのように支援していくのかを考える必要がある。さらに、これまで以上に多職種連携のチームアプローチを円滑にするためにも、各専門職の視野や発想を包括・統合的にとらえる視点が不可欠である。この視点こそがソーシャルワークであると考えられる。ソーシャルワークに関しては、2014年にソーシャルワークのグローバル定義が採択され、さらなる展開が期待されているところである。

そこで、End of Life Careの概念をソーシャルワークの視点から考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ソーシャルワークの視点から以下の方法を用いて研究を行った。

- (1) 先行研究をもとに、Careの概念を整理する。
- (2) 終末〈期〉ケアなどをめぐる概念の先行研究を整理する。
- (3) 西洋科学の知と臨床の知を考察する。
- (4) (1)～(3)と自らの臨床経験をふまえて、End of Life Careにおけるソーシャルワークの概念の考察をする。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会の研究倫理規程にもとづき配慮した。文献研究及び自らの臨床経験をもちに研究をすすめている。なお、利益相反はない。

4. 研究結果

“Care”には、狭義での介護ではなく、広義の生活支援ととらえることができる。

“End”には「目的」という意味と「終わり」だけでなく、「新しいもののはじまり」と

いう崇高な意味がある。まさに、End of Life は人生のまとめの時期であり、生き方の伝承の時期であるといえる。すなわち、End of Life Care は、人の生きざま・死にざまが遺される者たちの生き方へと伝承していくことである。そして、遺される者たちの心の中で生き続けることを意味している。

End of Life Care を臨床から見つめていると、科学が寄与することは少なくないが、必ずしも科学のみで対応できることばかりではないように考えられる。それは、実存性と科学性の両方がたいせつであることを意味している。

5. 考 察

End of Life Care におけるソーシャルワークの概念（定義にかえて）を以下のようにまとめることができる。

「End of Life Care におけるソーシャルワークとは、これまで生きてきた意味や価値を見つめ直していく時期における利用者の生活に立脚し、実存性と科学性の視座から利用者の身体的・精神的・社会的・スピリチュアルなニーズと家族らへのグリーフケアをも包含し、多職種連携のチームを背景として、利用者の生きざま・死にざまを遺される者たちの生き方へと伝承していくことへ寄り添う生活支援過程である。」

End of Life Care におけるソーシャルワークの概念は、基本や目的、方法などとして、以下のように整理することができる。

- (1) 基本—生活への視野と発想〔生活コスモス〕
- (2) 目的—利用者の自己実現と社会的自律性への支援、さらに家族らへのグリーフケアも包含した支援〔自己実現・社会的自律性・グリーフケア〕
- (3) 体系—利用者の身体的・精神的・社会的・スピリチュアルなニーズをめぐって、生活モデルとして、支援レパートリーの構成と的確な活用〔レパートリー活用〕
- (4) 焦点—利用者のこれまで生きてきた意味や価値を共に見つめ直し、生きざま・死にざまを遺される者たちの生き方へと伝承していくことへ寄り添う〔生き方の伝承〕
- (5) 展開—利用者・家族らとソーシャルワーカーの参加と協働を可能にする支援ツールを活用した支援展開〔参加と協働〕
- (6) 方法—利用者・家族らの実感をたいせつにする実存性と生活を包括・統合的にとらえる科学性を併せもった生活支援〔実存性と科学性の視座〕
- (7) 特性—多職種連携のチームを背景として、在宅と施設を含めた地域生活支援〔地域生活支援〕
- (8) 過程—利用者・家族らの変容・循環への支援局面の深化とフィードバック展開〔過程展開〕

参考文献：太田義弘・中村佐織・安井理夫編（2017）『高度専門職業としてのソーシャルワーク —理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館